

## 私はここにいます

### [聖書] テサロニケの信徒への手紙 3章 1～18節

終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところでそうであったように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように、また、わたしたちが道に外れた悪人どもから逃れられるようにと祈ってください。すべての人に、信仰があるわけではないのです。しかし、主は真実な方です。必ずあなたがたを強め、悪い者から守ってください。そして、わたしたちが命令することを、あなたがたは現に実行しており、また、これからもきっと実行してくれることと、主によって確信しています。どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるよう。兄弟たち、わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい。あなたがた自身、わたしたちにどのように倣えばよいか、よく知っています。わたしたちは、そちらにいたとき、怠惰な生活をしませんでした。また、だれからもパンをただでもらって食べたりはしませんでした。むしろ、だれにも負担をかけまいと、夜昼大変苦勞して、働き続けたのです。援助を受ける権利がわたしたちになかったからではなく、あなたがたがわたしたちに倣うように、身をもって模範を示すためでした。実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、「働きたくない者は、食べてはならない」と命じていました。ところが、聞くところによると、あなたがたの中には怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なことをしている者がいるということです。そのような者たちに、わたしたちは主イエス・キリストに結ばれた者として命じ、勧めます。自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい。そして、兄弟たち、あなたがたは、たゆまず善いことをしなさい。もし、この手紙でわたしたちの言うことに従わない者がいれば、その者には特に気をつけて、かかわりを持たないようにしなさい。そうすれば、彼は恥じ入るでしょう。しかし、その人を敵とは見なさず、兄弟として警告しなさい。

どうか、平和の主御自身が、いついかなる場合にも、あなたがたに平和をお与えくださるよう。主があなたがた一同と共におられるように。わたしパウロが、自分の手で挨拶を記します。これはどの手紙にも記す印です。わたしはこのように書きます。わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがた一同と共にあるように。

### [1] 教会の「危機」の中で

テサロニケの信徒への手紙(一、二)は、教会の危機の中にパウロによって書かれた手紙です。その「危機」というのは二重の意味があったと思います。一つは周

困からの迫害という危機です。それに対してパウロは、このテサロニケの教会の人々を褒めています。よく信仰に堅く立っていると。そしてもう一つの危機はイエス様の再臨ということに関して、教会内で混乱が起こっているという危機です。どういうことでしょうか。端的に言うと、**キリストが再び来られる**というのは本当なのか、少なくともすぐではなさそうだ。であるなら、もっと呑気に生きて行こうよと言う人々が教会の中に出てきたと言うのです。それに対してパウロは、教会に対し、そのようなことを言うような人々とは関わりを持たぬようにとさえ言います。日々の生活を蔑ろにすることは、神様の前に誠実に生きることとは違うと言うのです。「**兄弟たち、あなたがたはたゆまず善いことをしなさい**」と、この世にきちんと根を下ろして他者と共に生きることを勧めます。一見当たり前のようなことですがけれども、これはとても大事なことだと思いました。

信仰者、クリスチャンという人々は、「世離れした人、現実逃避に生きる人」と思われやすいのです。それは誤解なのですが、下手をすると、私たちも「ああ、早く再臨が来ればよいのに。そうすればこんな苦労はなくなるのに」と思ってしまうことはないでしょうか。私はたまに思ってしまうことがあります。けれどもパウロは5節の所でこう言っていますね。「**どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるように**」。いい言葉ですね。私たちは、神様に愛されています。この世で葛藤しながら生きる私たちをです。(今ならこのコロナの試練も含めてです!)そして、“あなたはこの地上で生きる中で、**イエス様の忍耐を思い見なさい**”と言うのです。イエス様は決して楽な生き方、自暴自棄な生き方を選ばれなかったお方ですね。忍耐しながら、苦しみながら**十字架への道**を生きていかれました。人々を、いや、私たち一人ひとりを本当に愛しておられたからですよ。「**愛は、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてに耐える**」(コリントー 13:7)ことだと、キリストご自身が、その生き様、死に様を通して教えて下さいました。このキリストに励まされて、必ずいつか与えられる御国の祝福を望み見ながらこの置かれた場所と関係を重んじて生きることが、キリストに救われた者の生き方だと聖書は語っていると思います。この手紙の中で、少々自堕落な感じになってしまっている人々とは関わることを用心せよと厳しいことを書いていますが、しかしパウロは「**その人を敵とは見なさず、兄弟として警告しなさい**」と言っています。これが愛ですね。切り捨ててはいけません。何故なら、「**イエス様はこの弱い兄弟のためにも死んで下さった**」(コリントー 8:11)からです。

## [2] 教会の「若さ」

教会とは、個性の集まりですね。先週もお話ししましたように、色んな花が咲く花畑が教会です。誰もが顔形が違うように信仰の現れ方も違います。それで良

いのですね。大切なのは、誰がこの「教会」という神様の畑に連れて来てくれたのか、です。きっと自分で選んで教会に来たように思っても、あのタンポポの綿毛のように、**聖霊**という風が、私たちが教会に運んできてくれたのではないのでしょうか？ 私たち、イエス様を信じるという一点以外は皆違う個性を持つ存在です。私はこの当たり前のことをこの頃とても繰り返し心に思うのです。牧師になったばかりの頃より、とても多く思います。恥ずかしい話、私は以前の教会の教会員だった時、結構「この人とは合う」「この人とは合わない」ということを心の中で思い描いていたように思います。要するに人を切り捨てていたのです。でも牧師になったら、その思いと戦わなければなりません。やはり。皆さん、「心が狭い牧師」なんて絶対嫌でしょう？ ですから、私自身が本当に日々イエス様に教えられ、変えられないといけないということを強く感じています。教会を「作って」いるのは、一人ひとりの信仰と個性です。それを牧師が邪魔をするようでは牧師の存在はわざわざとなります。「**信徒**」と「**牧師**」とが**協働で作る教会**。バプテストの教会はそれが特徴だと言いますが、これは大いなる実験をしているようなものです。ちょっとした綻びが全体にひびを作っていくこともあるのです。ですから、パウロも「**私(たち)のために祈って下さい**」(3:1)と言っていますけれども、教会は本当に祈り合わねばならない場所だと思われています。

さて、このテサロニケ教会は「**若い**」教会でした。初めに**福音**を運んだのはパウロたちで、そこに信じる者たちが起こされました。周りからの迫害も受けましたが、信じる者たちは励まし合い、その**教会の存在自体が「証し」**でした。パウロがこの手紙を書いたのは紀元50年頃と言われていますから主イエス・キリストが天に昇られて20年弱が経った頃です。殆ど全員が「**初代クリスチャン**」ということでしょう。そこには当然ながら「**代々のクリスチャンホーム育ち**」という人はいません。皆が、「**キリストこそわが救い主**」と信じてこの群れを作ったのです。

私は思ったのですが、**私たち川越キリスト教会**も、同じように「**若い**」教会と言えるのではないのでしょうか。創立50年。長いのでしょうか？ そして、テサロニケの教会と同じように、私もですが、意外と「**クリスチャン一世**」の人が多いうように思います。もちろん、親の信仰を受け継ぐということは大きな恵みであり、羨ましさも覚えます。けれどもクリスチャンホームに育った人も、どこかでイエス様との出会いを体験して、信仰者になります。クリスチャンは皆、ある時、「**新しく生まれる**」(ヨハネ 3:3)という体験をした者たちです。「新しく生まれた」のですから、若いのです! ペトロの手紙には、クリスチャンとは「**乳飲み子**」(ペトロ 2:1)のような者だと言っていますが、本当にそうなのだと思います。ただ霊の

乳である“御言葉”を栄養にして成長していく。御言葉には、人間を形作る全ての栄養が入っていると言うのです。そして、それを慕い求めなさいと。

### [3] 「神の家族」として繋いでいくもの

このコロナの時期は暫らく続くでしょう。これは教会の危機でもあります、教会が原点に立ち戻らされる神様からのチャレンジでもあると本当に思います。この時こそ、私たちは、教会としてイエス・キリストの言葉を慕い求めたい。皆一緒に霊の乳を飲む「乳飲み子」になりましょう！それが、教会の「若さ」です。敢えてこういう言い方をすることをお許し下さい。お互いに老けないで参りましょう！教会に来たら、一つでよいです、御言葉に感動し、それを受け止めて一週間を過ごして下さい。そして、それを照れずに(?)分ち合う教会でありたいと私は思うのです。川越教会の歩みはこれからです。新型コロナの感染不安がまた増大していますね。その中で私たちの主にある交わりをどのように良いものとしていけるか。単に習慣ではない礼拝と交わりが求められていると思います。

先日新聞で読んだのですが、若い女性写真家が、原爆被爆者のご家族の写真を撮り続け、「生きて、繋いで—被爆三世の家族写真—」という写真展を開催しています。9月まで汐留で行っているそうです。その堂畝紘子さんが撮られる写真というのは、普段の家族写真なのです。集合写真だったり、日常の顔であったりします。でも、それが心に訴えて来るのです。被爆という消せない現実を受けながら、世代を繋いでいる命、その存在の尊さ、また家族の愛を感じるのです。堂畝さんは言います。「写真の一枚一枚は、被爆者が生きて繋いだ証しです」と。それは「私という人間はここにいます。ここに生きています(した)」という心の声を雄弁に映し出すものです。今年には戦後75年です。被爆一世の方たちの多くはこの地上を去って行きます。でもその「家族」は、その事実を繋いで生きています。

教会は、「神の家族」ですよ。この家族は何を繋いで行くのでしょうか。会堂建築の思い出など…？それも大事かもしれませんが、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」と主は言われました。「私の救い、私の幸いは、主よ、あなたにあります」という信仰の告白、信仰の喜びこそ、繋いで分ち合うものです。クリスチャンの人生は、主イエスの希望に支えられた人生ですから老け込むことはありません。この場を神様によって呼び集められた神の家として、「私はここにいるのだ」ということを、礼拝を捧げながら証してまいりましょう。お祈り致します。

主よ、私たちはこの地上にあっては旅人ですが、だからこそ、あなたに帰る日まで、この地上を誠実に歩んで行きたいと思います。この神の家族の交わりを励まし、きよめ、あなたの愛に導いて下さい。イエス様の御名によって。アーメン。